

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第76号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)9月16日 日曜日

2018年(平成30年)9月16日 日曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜する。また放置されている縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。



「未曾有」と「想定外」は二度と聞きたくない—その② 予報関係者は生命を相手にしている臨場感を持って！ 福島第一原発の二の舞を危うく引き起こすところだった！

前号に続いての自然 災害対策続報

前号で「未曾有」と「想定外」は二度と聞きたくない—災害予知と気象予報と自然災害対策の大変革提言—「自然は未知である」という大前提に戻れ！という記事を掲載したばかりなのに、前号掲載の直後に大きな自然災害が二つも発生し、今月号でも同様の記事を取り上げるとは思いも寄らなかった。

害対策はやはり根本から直す必要があるとの思いをさらに強くした。予報のあり方も、自然災害の発生ということに対しての考え方も根本的に見直す必要があると強く思った。地震による液化化現象に至っては、そもそも住宅地設定を許可してはならない場所に許可するという法律がなぜまかり通るのか、全国で一斉に見直しが必要だとの思いも強くした。

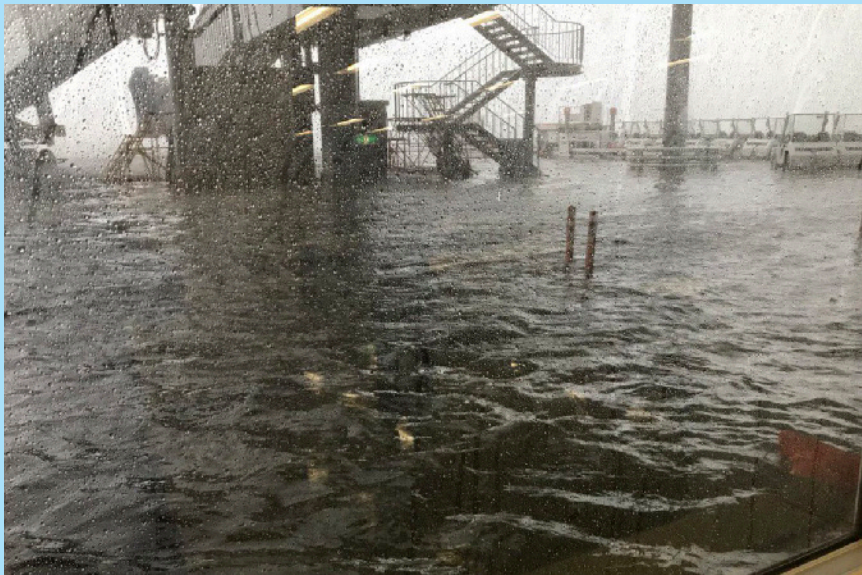
またタンカーが連絡橋に衝突して、利用客ら約五千人が孤立する事態となった。空港は、これが空港かと思えないほど水浸しとなった。当然ながら滑走路は使用不能で、飛行機はしばらく飛ばない状況が続いた。空港内も浸水により水浸しとなった。その水の高さは、最も深いところで90センチメートルもあった。そして何よりの失敗は、この台風被害で、空港内に取り残され、孤立した約五千人の顧客が、翌日まで放置されたことである。

その理由は、タンカーが衝突したため、空港と陸地を結ぶ連絡橋が通れなくなったことと説明があるが、なぜタンカーが衝突するような状況になるのか理解ができない。以上のはじめ、起きてしまったことである。しかし、どうしても、「そもそもなぜ？」という疑問が口をついて出ることを禁

じえない。監督官庁が決めた基準をクリアしたから建設したままで、われわれ空港関係者には責任はない、悪いのは台風が想定外の大きさだったことであり、タンカーが衝突するというアクシデントが起きたせいであり、われわれに責任はないという声がかえりてきそうである。そしてまた、こうした自然災害の後始末の際に必ず出現する—「ではいったい誰の責任なのか？」という責任のなすりあい場面が繰り返されるのであろう。この状況は、この国が自然災害の頻発する国であることを忘れ、自然の驚異を見下した結果が導くものであると痛烈に思う。

それとともに、災害対策へのどうしようもない違和感も禁じ得ない。つまり、災害の発生を予測もしていないのだから、被害が発生したときの対策も立てていないということであり、そうした姿勢をまざまざと海外からの観光客に対して見せつける結果となってしまうのだ。

地震研究とメディアはまだ南海トラフ？ 地震研究は相変わらず、南海トラフ大地震が中心のようである。マスメディアもその流れに追従して騒ぎ立てる。そうすることで予測地域として取り上げられていない地域は何となく安全かと



関西空港は、海の港か、空港か？



関西空港も浸水



空港に置き去りの客

思い、対策に必死さを欠くことになるのではないかと。いつたいつまでこんなことを続けるのであろうか。

2009年に発生したイタリア中部地震では、大地震の兆候を警告できなかったとして、イタリアの地裁は防災庁付属委員会メンバーの地震学者ら7人に対し、禁錮6年の実刑判決を言い渡したという例がある。

日本では考えられないことではあるが、妙にすつきりした気分になったことを思い出す。

地震予測と対策に関係する人たちとその所属する機関からは、警察や消防、自衛隊などと異なり、人命を相手に仕事をしている感覚が伝わってこないのである。そして、地震が発生した後に張り切るように見える。詳しく発生のメカニズムを説明されても鼻白むのだ。なぜ発生前に言わないのか。

北海道大地震

そして、起きてしまった。震度7という大地震である。大規模な山崩れ、道路の陥没、土砂が流れ込んでの犠牲者の発生、家の倒壊、おまけに、なぜか液化化現象が起きて、道路に泥があふれ、道路はねじれ、家も大きく傾く。

そして大規模な停電も発生した。物資の供給網は寸断され、生存に不可欠の飲料水や食料調達もままならない。

あの東日本大震災からまだわずかに七年半しか経っていないのに、何ら教訓が生かされていない。

教訓が活かされない国

いかに忘れやすい国民といえども、あの東日本大震災を忘れてはいないだろう。ならば、だれがあの経験を活かさないのか。監督官庁か、政治家なのか。

あれだけ大騒ぎし、次の災害時には二度と同じことにならないようにしようと思つたはずではなかったか。しかし、まるでデジャブのように同じことの繰り返しが目に見えて展開される。いったいこの国はどうなっているのかと叫びたいと思うのは筆者だけではない。まい。しかし、一番怒りたいのは被災者たちである。

自然災害の強さが戻ってきた

前号でも触れたが、不幸にも、日本列島内の自然災害のエネルギー規模が拡大しているのではないかと。

自然の観測が開始されてから現在までの約百五十年間は、巨大な自然災害がなかった。災害データもそれに呼応したものであるのは当然である。

しかし、仮に筆者の考えが正しいとしたら、この約百五十年の観測データは、少なくとも巨大災害対策には役に立たないといえる。現在こうした学問分野が存在するかどうか知らない

が、もともと自然災害の頻発する日本であれば、こうした研究に費用を投じてもらっても文句は言わない。

もしそうした機関がないのであれば早急に立ち上げるべきである。

特に、火山の研究にはもっと力を入れて欲しい。

日本国中の火山が活発化しているのではないかと思える節がある。

なかでも、単体の火山の噴火の数千倍もの規模と言われるカルデラ噴火という巨大噴火の研究には注力して欲しい。

カルデラ噴火の周期は約七千年と言われており、該当する火山も現に存在しているのである。

原子力発電所の冷却電源喪失問題

最後に、あまりマスメディアも騒がなかった大きな問題を取り上げよう。

それは、今般の北海道地震による原子力発電所の冷却電源喪失問題である。

AERA dot. 編集部・西岡千史氏の記事から以下抜粋する。

なかでも驚かされたのが、北海道電力の泊原発(泊村)で外部電源がすべて失われたことだ。泊村の震度は2。にもかかわらず、現在は非常用ディーゼル発電機で、燃料プールにある使用済み核燃料(U-235)体の冷却を続けている。幸いにも、3基の原子炉は運転停止中

だった。

2011年の東京電力福島第一原発事故による大きな教訓は、大規模災害が起きても「絶対に電源を切らさないこと」だったはずだ。

それがなぜ、わずか震度2で電源喪失寸前まで追い込まれたのか。

「泊原発には3系統から外部電源が供給されていたが、北電の中で3つの変電所を分けていただけと思われる。北電全体がダウンしてしまえばバックアップにならないことがわかった。今回の地震で、揺れが小さくても外部電源の喪失が起きることを実証してしまった。『お粗末』と言うしかありません」(岡村氏)

北電によると、地震発生直後に同社最大の火力発電所、苫東厚真発電所が緊急停止。電力供給の需要と供給のバランスが崩れたことで周波数の低下が起き、他の発電所も運転が止まった。苫東厚真発電所の復旧は、少なくとも1週間かかるという。泊原発の非常用ディーゼル発電は最低7日間稼働できるというが、「事故に陥らなくてよかった」ではすまされない。

「北電だけの問題だけではなく、監督官庁である経産省や原子力規制委員会にも責任がある。このような事態が起きることを想定して、原発施設の電源確保の仕組みをチェックしていなかったという点。これは大問題です。近づく南海トラフ地震でも、すべての火力発電のバックアップを想定しておくべきです」(岡村氏)

現在、発電所の再稼働に向けて作業が行われているが、電力復旧のめどは立っていない。もし、泊原発で非常用のディーゼル発電が故障などで使えなかった場合は、「最後の砦」であるガスタービン電源車に頼らざるをえなかったことになる。今回の地震は「原発への電源供給」という災害対応の「基本中の基本」に問題があったことを明らかにした。

何たるザマだろうか。この事実が大きく報道されないことにも驚くばかりである。おそらくマスメディアに圧力もかけて、報道規制をしたのかもしれない。しかし、実状は、北海道を中心として「非常事態」が起きていたのだ。福島第一原発の二の舞であったかもしれないのだ。

しかもそれを国民に公開して、謝罪しないのである。これこそが、国の一番の災害対策のお粗末さ加減を示すものである。

「北電だけの問題だけではなく、監督官庁である経産省や原子力規制委員会にも責任がある。このような事態が起きることを想定して、原発施設の電源確保の仕組みを



地盤崩壊



厚真町の土砂崩れ



車道崩壊



液状化



**第35回
三陸酒海鮮会
2018.9.1**
ご参加いただいたみなさんに感謝申し上げます
次回は10/20



第49回 水産業再興のための料理レシピ紹介 《鮭のフライ》

今回は、北海道地震の被害が収束する前にもかかわらず、函館在住の松本さんに、店頭で食材が大いに不足している中で料理していただいた上でご寄稿いただきました。ほんとうにありがとうございました。また、地震で被災されたみなさま、お見舞い申し上げます。



郷土料理愛好家
松本由美子氏

『**材料**』 鮭(生)1枚、塩、コショウ、小麦粉少々、卵、パン粉＋黒胡麻、揚げ油 適量

『**作り方**』 生鮭を洗い、キッチンタオルで水分を取っておきます。生鮭に塩、コショウをします。小麦粉、卵、黒胡麻と合わせたパン粉を順につけます。油の温度がみながら、中まで火が通るまで、弱火にしじっくり加熱します。揚げる直前に高温にし、油切りをよくしてカラッと揚げます。野菜をつけ合わせ、熱い内にいただきます。

まだ、地震の影響で店頭には魚がありませんでした。秋刀魚がいくらかと鮭と干物魚が多い状況です。低気圧で数日、海も時化していました。(松本談)



写真でお伝えする

東北の風景 (名残おいしい夏の山) 写真撮影 尾崎匠



世界遺産だけじゃない！ ならどこへ行く？ 平泉観光の穴場スポット

この連載でも、自分のブログでも、「平泉は世界遺産だけの町じゃない！」というのを再三に亘って主張している。「ほら、ここにも、ここにもあるよ」と紹介した私の「世界遺産以外の平泉オススメスポットマップ」

この連載でも、自分のブログでも、「平泉は世界遺産だけの町じゃない！」というのを再三に亘って主張している。「ほら、ここにも、ここにもあるよ」と紹介した私の「世界遺産以外の平泉オススメスポットマップ」

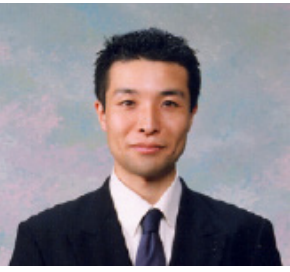
9つある平泉の鎮守社

鎮守社というのは、その都市を守護する役割を持った神社のことである。通常、国府所在地にしかなかった鎮守社が平泉にあったということは、平泉が国府所在地と同クラスの都市であった証左でもある。その平泉の鎮守社について、鎌倉幕府の公文書「吾妻鏡」には、中央に惣社(そうじや)、東方に日吉(ひよし)、白山(はくさん)の両社、南方に祇園(ぎおん)社、王子(おうじ)諸社、西方に北野天神(きたのてんじん)

この連載でも、自分のブログでも、「平泉は世界遺産だけの町じゃない！」というのを再三に亘って主張している。「ほら、ここにも、ここにもあるよ」と紹介した私の「世界遺産以外の平泉オススメスポットマップ」

執筆者紹介

大友浩平 (おおくまこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagna5/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>

ん)、金峯山(きんぷせん)、北方に今熊野(いまくまの)、稲荷(いなり)等の社があったと記されている。これだけ多いと、「平泉は世界遺産だけの町じゃない！」というのではっきりと示せているとしても、実際にどこに行けばよいのかかえって分かりにくいかもしれない。そこで今回は、その中でも特にオススメの場所を紹介したいと思う。私のオススメは「鎮守社」と「月山」である。

鎮守社というのは、その都市を守護する役割を持った神社のことである。通常、国府所在地にしかなかった鎮守社が平泉にあったということは、平泉が国府所在地と同クラスの都市であった証左でもある。その平泉の鎮守社について、鎌倉幕府の公文書「吾妻鏡」には、中央に惣社(そうじや)、東方に日吉(ひよし)、白山(はくさん)の両社、南方に祇園(ぎおん)社、王子(おうじ)諸社、西方に北野天神(きたのてんじん)

この隆蔵寺のあった場所は分かっていない。先ほど北野天神に行ったT字路の東側、東北自動車道のガード下から、90mほどのところを右に曲がって300mほど坂を登っていくと、毛越地区の公葬地(共同墓地)がある。その下には一面に田んぼが広がっているが、この田んぼの一角に隆蔵寺があったとのことである。従って、稲荷社もこの田んぼのどこかであったのだろう。

最後に中央の惣社である。惣社というのは、その地域の神をすべて合祀した神社のことだが、実はこの惣社があった場所も分かっていない。いくつかの説があるが、今のところ最も有力と思われるのが、金峯山社があった場所に惣社もあったというものである。ただ、金峯山社が惣社も兼ねていたというのではなく、同じ敷地に金峯山社と惣社が併設されていたのではないかと考えられる。金峯山社と見なされている花立廃寺跡の北に隣接する平泉文化遺産センターの玄関付近から、かつて礎石建物跡が出土しているから、それが正しいかと推測できる。

以上が9つの鎮守社である。先ほど江戸時代の文書に稲荷社が西方鎮守として記載されていると書いたが、位置関係から考えてみても、最初に紹介した吾妻鏡にある「西方」の金峯山社と「北方」の稲荷社は、方角が取り違えられている可能性がある。実際には、北方の今熊野(熊野三社)の向かいにある金峯山社(花立廃寺跡)は西方ではなく北方の鎮守、西方の北野天神の近くにあって稲荷社は北方でなく西方の鎮守であったのだろうと考えられる。

これら9つの鎮守社のうち、白山妙理堂、八坂神社、王子社跡、北野天神社、花立廃寺跡は、「見ルベキモノアリ」として国の特別史跡にも指定されている。それぞれに風情のある場所であり、もともと知られてほしいスポットである。なお、鎮守社については、前述のマップと別に、「平泉の鎮守社(五方鎮守)マップ」(<https://www.google.com/maps/d/viewer?hl=j&mid=1n3TfX0-USmBTANU5own1XvJRWGP9KobQ&ll=38.97621699112218%2C141.11434645000008&z=14>)を作成したので、そちらを参照していただきたい。

境内社もあり、まさに神の山であることを実感する。三峯神社は源頼義、義家が前九年の役で安倍氏に苦戦していた折、日本武尊が東夷征討に際して武州三峰山に登って諸冊二尊を奉祀したという故事にあやかって陣中で諸冊二尊を奉祀し、安倍氏を討つた後に祠を立てたというのが事の起こりで、その後、江戸時代の享保元年に秩父にある三峰神社から改めて分霊が勧請されたそうである。一つの山に奥州藤原氏に關係する神社とその敵役となった源氏に關係する神社が共に祀られているというのも興味深いことである。

中尊寺の奥の院・月山

もう一つのオススメスポットは月山である。と言っても、出羽三山の一つ、夏スキーで有名な山形の月山ではない。中尊寺のある丘陵と衣川を挟んだ向かいに稲荷社が西方鎮守として記載されていると書いたが、位置関係から考えてみても、最初に紹介した吾妻鏡にある「西方」の金峯山社と「北方」の稲荷社は、方角が取り違えられている可能性がある。実際には、北方の今熊野(熊野三社)の向かいにある金峯山社(花立廃寺跡)は西方ではなく北方の鎮守、西方の北野天神の近くにあって稲荷社は北方でなく西方の鎮守であったのだろうと考えられる。

山頂の月山神社に向かう道は二つあり、一つは山の東側にあるこの三峯神社の境内を通って登っていく道、もう一つは山の北側にある鳥居をくぐって階段を登っていく道で、後者の方が本来の参道なのだろう。この鳥居の脇にある階段を少し登ったところにある荒沢神社は、かつて月山神社が女人禁制だったことと關係しており、この荒沢神社は女性でも参拝できたということである。

そして、何より興味深いのは和我叡登拳神社である。月山の山頂にはどちらの道を行ってもおよそ10分もある鳥居をくぐると正面に月山神社、右手に境内社が祀られている。他に月山神社と三峯神社と荒沢神社に

は境内社もあり、まさに神の山であることを実感する。三峯神社は源頼義、義家が前九年の役で安倍氏に苦戦していた折、日本武尊が東夷征討に際して武州三峰山に登って諸冊二尊を奉祀したという故事にあやかって陣中で諸冊二尊を奉祀し、安倍氏を討つた後に祠を立てたというのが事の起こりで、その後、江戸時代の享保元年に秩父にある三峰神社から改めて分霊が勧請されたそうである。一つの山に奥州藤原氏に關係する神社とその敵役となった源氏に關係する神社が共に祀られているというのも興味深いことである。

中尊寺の奥の院として栄えたとも伝えられている。そして、何より興味深いのは和我叡登拳神社である。月山の山頂にはどちらの道を行ってもおよそ10分もある鳥居をくぐると正面に月山神社、右手に境内社が祀られている。他に月山神社と三峯神社と荒沢神社に

イデオロギーよりアイデンティティという事

最近、めつきり「東北の独立」という事を私は言わなくなったな、と思う。

初めて東北の独立、などという事を考えたのは今から



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

ら二十数年前、二十六、七歳の頃だったと思うが、二〇一一年の震災と原発事故の後、道州制や独立について共通する考えを持つ仲間

に会い、話す機会を得て盛り上がった。その後、二〇一四年のスコットランド独立に関する住民投票が強烈な刺激になり、あらためてこの問題について考える良い契機となった。結果的にスコットランドが独立を選択しなかった事が、以来私の「独立熱」をある意味冷ましてしまったのだろうか。

先月、沖縄県知事・翁長雄志氏が亡くなられた。翁長知事といえば、宜野湾市の普天間から名護市辺野古への米軍基地移設に対する

「いかなる手段を用いても阻止する」という強い表明で知られる。沖縄といえば琉球独立論だ、と勝手に親近感を抱き、独立を目指す同志だなどと捉えていたが

実際は遠方で何が起ころうと対岸の火事のような認識で、翁長知事を巡る評価や批判も雑多に飛び交って訳がわからなくなり、情報収集も敬遠気味だったのが正直なところである。

まず、前述のように私を困惑させてきた、翁長知事を巡る批判とはどのようなものだったか、を洗ってみよう。とりあえず、各項番号をつけて並べ、浅学ながら自分なりの見解も添える。

一、「翁長知事の考えと沖縄県民の考えは必ずしも一緒ではない」
二、「米軍も自衛隊も出て行け、お金はくれ、という事では極東の安定を乱す」
三、「不正がすごく多い。中国の工作員も多い。」

以上は作家・百田尚樹氏の「沖縄二紙はつづせ」発言で有名な会合にも名を連ねるといふケント・ギルバート氏の言。

詳細を調べると、一、はおそらく翁長知事が支持母体「オール沖縄」とともに『イデオロギーより、アイデンティティ』即ちあらゆる政治信条を越えた沖縄人としての団結を標榜する事から、確かに基地移設容認派も半数近く存在するが、

反対派は過半数であり、民主主義的にも民意である事には変わりない。
二、は容認派の理由にもつながらるのだが、日本政府から基地関係の膨大な補助金がこれまで降りてきた事から基地地主や自治体の「貰って当たり前」のゆすりた

かり体質は深刻とも言われるが、これも云わば原発村と同様の政府の罫であり、基地による被害と引き換えに金を出すから黙っているという論理とも取れる。

三、の不正については、政治資金規程違反、談合、癒着、果ては敵対候補者ボスターへの落書きなどの凶書カードを配ったただの様々な話が飛び交い、正直よくわからない。安倍官邸が情報部や公安を使いスキヤンダルを探索せ、デマを流す事すら加担したとも聞かす、中国の工作員、という話もそうしたデマに関連する。

そもそも翁長氏の中国への接近には、中国との友好な関係を築く事によって、米軍基地の必要をなくしていく狙いがあった。しかしこれが沖縄独立を中国に支援してもらう為の交渉だとか、実娘の夫が中国共産党員だとか全くの作り話がこれでもかと流されたのだ。

己の正当性を主張する者が、わざわざデマを作り、流す必要などないはずで、私はいずれにも無批判になる事には注意しながらも、中央政府側への不信感を募らせていくのだった。

は日本のこの演説を捉えられてのスピーチ、渡航中の交通・宿泊費などが公費で賄われた事などが以下のように批判された。「県民の為に仕事すべきだろう。県民の為に程遠い活動に、県民の税金が使われているのである」

知事が行った事が、県民の為に程遠いかどうかは疑問なのだが、公費の使い方はどうなのか、は私には判断し兼ねる。県知事としての参加資格がない、という事も重々承知で行ったのだらうし、世界に現状を知ってもらうという、僅かな

そして重大なチャンスに参加資格が云々で逃す訳にはいかない、と考えたのかも知れない。同じ状況下なら、私もそうした可能性はある。

もう一つ、どうしても看過できない文言がある。「翁長知事は県外移設が不可能である事を知りながら、その実現を公約に掲げ当選した。県民を騙したのだ」

ここで前提となっている「県外移設が不可能」とは何か根拠なのか。民主党政権で防衛相を務めた森本敏氏が在任中の二〇一二年、「軍事的には沖縄でなくとも良いが、政治的には沖縄が最適である。」と述べた。つまり「政治的に」とは、「本土日本人の大半の意思で米軍基地を置いているのに、いざ『本土に』移設しようとする」と反対が強いので『政治的に』難しい」と

いう意味なのだ。これは、本土に住む私たち全員の責任でもある。

かつて、翁長氏と同じように沖縄アイデンティティを主張し、基地の県外移設を公約にした前任の仲井眞弘多氏は、当選後に一転して辺野古埋立てを承認、県民の信頼を失う。

一体いかなる困難が仲井眞氏を襲い、県民を裏切るという苦渋の決断に至らしたのかは同じ立場に立つた者以外に知る由もない。「差別されているとか、自分の考えたストーリーだけを訴えている。」

「辺野古反対だけが仕事ではないだろう。」
仲井眞氏が翁長知事の行動を何かと非難する中で、「沖縄独立論など、笑い話、酒飲み話に過ぎない。」と口にしたのは気になった。

笑い話、というのはいくらか何でも突き放し過ぎではないか、と思ったのだが、実は意外な事に、当の翁長氏は「沖縄独立論」には反対の考えだったのだ。

本から分離するような流れに追い込まない為なのだ。徹底して「日本の中の沖縄」を意識し、日米安保も否定するどころかいかに安定的に維持できるか常に考えていた点で、最後まで保守の中の保守だった。佐藤氏は語るのである。

ここまで書いてきて、私はこの沖縄が置かれてきた状況がもし東北に降りかかっていたらと思ひ戦慄するとともに、「東北の独立」のあるべき形とはどういふものかと考えさせられた。

ここで、再びスコットランドの独立運動に想いを移そう。そもそもあれほどイングリッドによる長年の、差別的な統合支配を憎み、脱却を望んできた誇り高きスコットランド人が、独立を選択しなかったのは何故だったか。その背景にはこの住民投票より十五年前、トニー・ブレア政権下で実現した、三百年ぶりの独自の議会の復活と、司法・教育など多くの決定権の委譲という極めて劇的な出来事があった。

スコットランドの人々の多くにとつて重要だったのは、スコットランドが独立国家になる事よりも、自分たちが独自の民族としての尊厳を取り戻し、自らの基本的な事を自ら決められる事。そして何よりもそれを他の誰でもなく、イングリッドを含む全英国に認めてもらう事だったのではないだろうか。

つまり、彼らは既に必要なものを手に入れていた。それは沖縄の翁長知事が、日本との本当の良い関係を築く為に絶対に欲しかったものでもあるのだ。

例えば、十二世紀奥羽におよそ百年経営された平泉を首都とする北方社会もまた、形式上天皇を頂点とする中央政府に従属していたが、その内実には完成された行政と、自国領の資源で隣国・遠国と交易ができる経営能力を備え、構造的には事実上の独立国家だった可能性が高いと言われる。

ここでも奥州藤原氏が重視したのは、形式的な国家としての独立ではなく、「隣国」の要求にいかに対応して安全を図るか、そしてその上でいかに奥羽自身の利益を作り出すか(即ち、奥羽人としての誇り・アイデンティティを確保できるか)であったはずだ。

しかし、平泉を中心とした奥羽の国は失われ、アイデンティティは破壊されて分断され、また再編された。六百年を過ぎ、奥羽越現藩同盟で再び一つとなるも、長く分断されたアイデンティティが、敵に隙を突かれ瓦解するのに時間はかからなかった。

アイデンティティという概念が、繊細で危うく、扱いきれないものだという事も、沖縄の多くの人が、そしてしかすると東北人の何割か

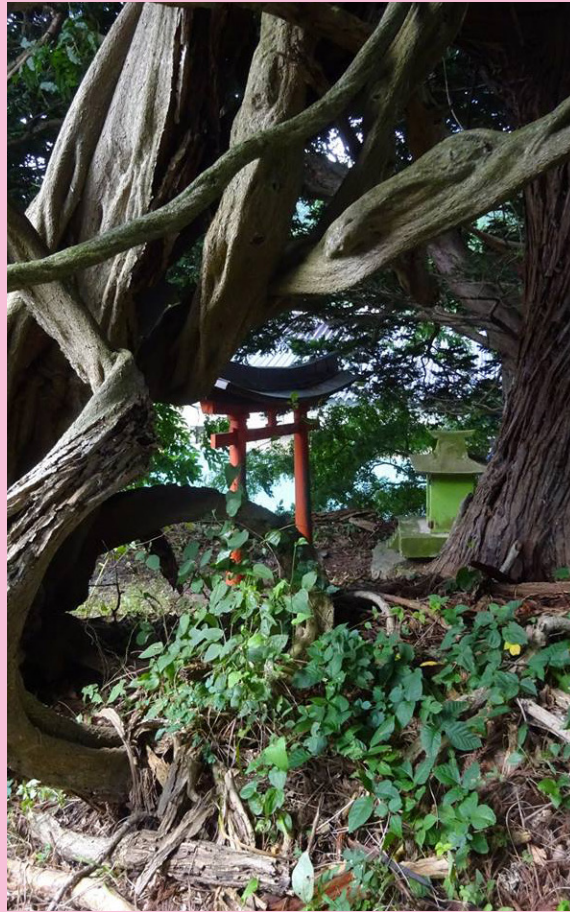
も、認識しているだろう。アイデンティティは現代、同じ地域に住んでいる人同士でも微妙に違う、極めて多様なものになっている。一つのアイデンティティに固執した活動が主流になれば、必ず脱落するもの、反感を抱く者が現れる。今の『オール沖縄』主導の運動にも、その溝や亀裂に政府が付け込み、分裂させようとする目論み、その危機が指摘されているのだ。それは多くの前例を経験した東北人にとつても、政府の言う中国の脅威よりも確実な危機に思える。

沖縄出身のライター・島袋寛之氏は書く。「かつてこの島では、『オール沖縄』という便利な言葉を作らなければ、分断を乗り越え手を取り合う事ができなかった。しかし今僕たちは、『沖縄』そのものを受け止め、許し、慈しみ、その未来を育まなければいけないのだ。」

アイデオロギーでもなく、アイデンティティでもない。それらを越えて、私たちは強くなれるのか。「東北」そのものを受け止める事ができるのか。沖縄をこれまでになく近くに感じながら、ここで戦っていききたい。



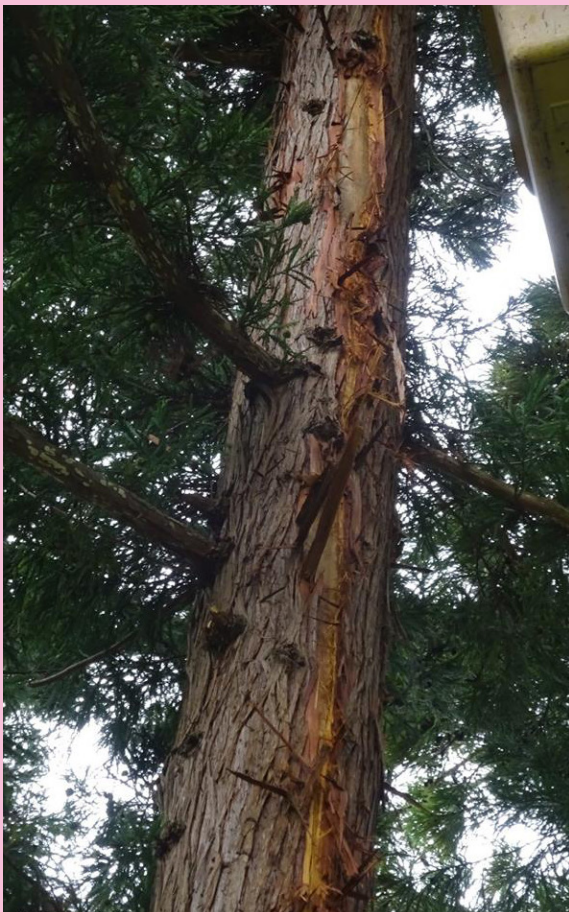
キツネノカミソリ



鳥居の表裏



ミズアオイ



落雷痕

今年の夏は、まるで天変地異でも起きたかのようであり、季節をじっくり楽しむ余裕はまったくなくなかった。針路予想がつかない大型台風はたて続けに襲来し、大地震も来たり、暑すぎたり、急に冷え込んだりした。

そんなあわただしさのなかで、いつのまにか夏が終わっていた。遠野でも激しい雷があったようで、大木が落雷の跡を残している。他方、季節の花や鳥居、石塔などの写真を見るとほ

つとする。また、夏祭りの次はいよいよ秋祭りを迎えられると、再び落ち着いた季節の進行を感じられて、心の安定を取り戻せるのである。

シリーズ 遠野の自然 「遠野の白露」 遠野 1000 景より



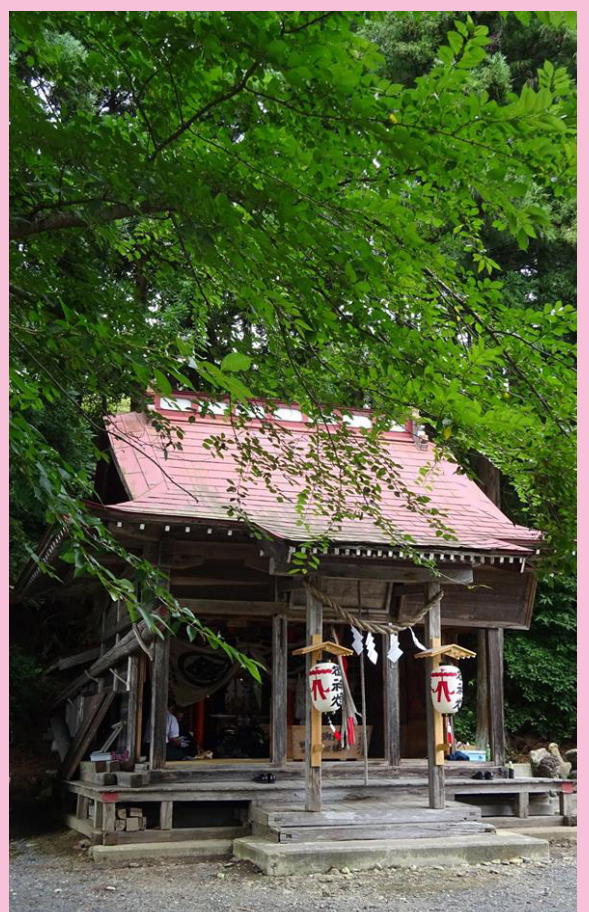
ししとさんさ



祭りの日



石塔 (月三)



駒形神社

歴史の常識を疑え！

そうすれば、これまで、いかに間違った前提で ものを考えてきたかがよく分かる 連載企画 ⑨ 【東北先史時代学】

歴史見直し論議の核心に迫ってきた

このシリーズも、今回で九回目である。連載の回数が進むに連れて、徐々に論点が明確に絞られてきて、いよいよ歴史見直し論議の核心に迫ってきているのではないかと自負している。今回は、そうした背景もあり、一挙に核心に迫るため、少々理屈っぽく迫っていきたくと思う。まず、この問題は簡単ではないし、さまざまな要因

が複雑に絡んでいて、最初からややこしいことをお断りしなければならない。だから、最初から簡単な答えは存在しないとあきらめていただきたい。したがって、どうしても理屈っぽく、複雑な理屈になることをお許しいただきたい。

歴史の軽い読み物のように、リズムよく展開することはないことを最初にお断りしておく。

人は「前提」だらけで生きている

おそらくすべての人は、何かものを考えるとき、その出発点として、さまざまな「前提条件」を再確認するところから始めることは避けられない。

そんなことをしていたら、いくら時間があっても結論に辿り着くことはむずかしい。いや、永遠に辿り着くことはないだろう。

その理由は、确实で、科学的に証明できる「前提」などこの世のどこにも存在しないからである。「前提」の正しさを厳密に証明するには、たくさんの障害が存在し、しかもどれひとつとっても、容易に乗り越えることはできない。第一、この世界に絶対の正しさなど存在しないことは優秀な哲学者や科学者であればみな知っている。

それでも「正しい前提条件」にこだわり続ける人間は、単に理屈っぽい人間と

いう評価を軽く飛び越え、かなりの変人か狂人と位置づけられるであろう。だからこそ、通常は、各人がそれまで生きてきたわずかな経験から導き出した、不完全なさまざまな「前提」、あるいは「常識」と言い換えてもいいが、そうしたものを身にとりまといて生きており、それを疑いようもない出発点として考えていくのである。

その際、すべての人に正しいのか、証明できるかなどは問わないのである。自分が正しいと思えばいいのである。

人はそうやって、いまも過去も未来も生きているのである。

集団の前提と常識

二番目の要因として、社会集団の問題がある。人間は社会集団を形成しないと生きていけない動物である。

そこで、個人を越えた、集団の「前提」や「常識」が必要になる。

しかも、それらを集団の構成員に、有無を言わず強制するのである。そうしないと集団がなかなか形成されないし、維持できないからである。当然である。みなバラバラの「前提」と「常識」を持つていたら、第一、コミュニケーションが取れないだろうし、協同生活も維持できないし、協同作業など望むべくもない。

時代の前提と常識

しかも、この「前提」や「常識」は、時代とともに変化するのも常である。确实で、科学的に証明できる「前提」など存在しないのだから、不動ではないのは当然である。

時代の経過につれ、また、科学や技術の進歩によって、あるいはそれまで出会ったことのない他民族と出会うことなどで、それまでの「前提」や「常識」が覆され、新たな「前提」や「常識」が形成され、それを硬く定着させるために、社会集団に新たな「教育」という強制が繰り返されるのである。

勝者側と敗者側の前提と常識

さらに、組み合わせを複雑にするものに、どの社会でも、どの時代でも発生する勝者側と敗者側の「前提」や「常識」の問題がある。

いつの時代の、どの程度の勝ちと負けなのかによっても、それらの「前提」や「常識」が、どういう関係に変化していくが読みにくいので余計に分かりにくい。

時代的に古いのであれば、忘れやすい人間のことでかから、時間が経つにつれ、両者間の差異はほとんどなくなっているかもしれない。

勝ちと負けがあまり決定的でなく、双方に遺恨を残さない形のものでなければ、これも時間経過とともにすくなく忘れ去られてしまうかもしれない。

また、勝者の側からの「教育」が行き届くことで、いつしか敗者の側の「前提」や「常識」も完全に忘れ去られ、勝者の「前提」や「常識」に入れ替わっていくかもしれない。

「歴史教育」の恐ろしさ

よく、歴史教育は恐ろしいと言われる。しかし、その本当の恐ろしさは想像以上である。日本国内の勝者と敗者だとさまざまな反論や異論が出るだろうから、海外の国との比較にして、分かりやすい構造にしてみよう。

そこで、先の戦争の勝者であるアメリカと敗者の日本の関係から考察することにしてみよう。

歴史教育の恐ろしさが明瞭に理解できる広島と長崎に投下された原爆について、アメリカの学校ではどう教えられてきたかを考えてみよう。

アメリカの学校では次のように教えられてきた。今もそうである。

原爆投下は歓迎すべきことではないが、アメリカ人の犠牲者がそれ以上増えないようにするため投下されたと教えられてきたのだ。

そして、日本国民ならみな知っているように、多くの子供たち、女性たちを含めた非戦闘員が一瞬にして殺されたのである。そして生き延びた被爆後も苦しみながら死んでいったのである。

アメリカ人は、実際に日本本の広島や長崎の原爆資料館を見なければ、その原爆投下の実態は理解せず、学校で教えられた通りのこと

を信じ続けるのである。多くの、原爆投下に関する学校教育をうのみにするアメリカ人と、ほとんどの日本人の間には、両極端の見解が対峙する。これが歴史教育の恐ろしさである。

日本の歴史教育

アメリカにおける歴史教育ほどではないが、日本の古代、大和朝廷が東北に侵攻したときの様子を想像してみると、ほとんど大差のないような強引な「歴史教育」がなされたと考えてもそう大きく外れていないだろう。

つまり、攻めていく朝廷側では、蝦夷(えみし)は野蛮人で、文化を持たず、粗暴で、人に迷惑ばかりかけている。蝦夷の乱暴狼藉に困っている人もたくさんいるから、攻め殺しても当然なのだ、というような教育があったと想像される。

こうした教育により、実際に、平和で無防備な蝦夷の多くを殺害したのである。それは単なる想像ではなく、かなり事実に近いだろう。

しかし、だれもそれを書かない。なぜだろう。

千三百年前の敗者の前提と常識は継承されてきたか

こうした歴史教育に関する複雑な要因を念頭に、あらためて、千三百年前の敗者の前提と常識は継承されてきているか、と問いたい。いうまでもなく、千三百年前の敗者とは、当時の東北に暮らしていた住民、朝廷側からは「蝦夷(えみし)」と呼ばれていた人々である。

彼らは、その時代に、確かに朝廷に負けたのである。戦いに負けて、自分たちの領地への侵攻を許し、支配され、蝦夷とさげすまれたのである。

さらには、自分たちの独自の文化も奪われたし、長い年月をかけて構築してきた社会システムも破壊され、同じく長い時間をかけて培ってきた宗教も宗教儀式も、宗教意識も失ったのである。

いわば、アイデンティティのほとんどすべてを失ったのである。

喜んでそうした支配と変化に従ったわけではないことは容易に理解できるだろうが、そのとき何を失い、どのような思いを抱いたであろうことはすつかり忘れ去られている。

あまりにも時間が経ちすぎて、しかもその後の勝者側の「教育」によって、もうだれも明瞭に思い出せないのである。かつ、だれもその思いを継承していないのである。

いや、もはや、そうしたことを思い出す必要もないと思っている人も多いと思うし、ほとんどがそうである。

しかし、それでほんとうにいいのだろうか。

自分の思考の基盤を疑ってみよ

言いたいことは、自分たちが受けてきた、東北古代史に関する歴史教育を疑い、再度、日本史を掘り返してみようということである。

この部分だけは「前提」や「常識」を疑ってみよ、何の疑問もなく受け入れるのではなく、よくよく検証してみよ、ということである。

歴史教育を振り返り、学校で教えられてきた「歴史」は本当に真実だったのか、単に勝者の側の強引な押し付け教育の成果を疑うことなく、唯一の真実と思いついていないかを考えてみようとの呼びかけである。筆者が、こしはばらくの間、東北の古代史を調べてみたところ、やはり、どうも勝者の側の歴史観の押し付けと思える部分が頻発してくるのである。

そこから、ひよつとしたら、千三百年前の東北の歴史はすべて嘘で塗り固められたものではないかとの疑念がふつと湧いてくるのを止められないのである。

東北再興の再出発点

筆者としては、この東北古代史の再発掘こそが、東北復興ならぬ、東北再興の再出発点と信じる。また、その再発掘で掘り起こされた真実を見るとき、東北再興の方向性も見えたと信じる。